

ベトナムにおける日本文化研究の諸課題

TRAN Thi Chung Toan

(ベトナム国立大学ハノイ国家大学)

はじめに

ベトナムの歴史上 16 世紀に日本との交流が始まった。当時、日本の商人が、貿易を目的とし、朱印船に乗ってベトナムに来航、「日本人町」¹を作り、両国関係の歴史に交流の証を残した。また、20 世紀初頭、1905 年に抗仏運動の一環としてファン・ボイ・チャウというベトナムの青年が日本の援助を求めることを目的として日本へ渡った。その後、「東遊運動」という運動を行い、303 人²のベトナムの青年達を日本へ送り込み、彼らに日本留学の機会を与えた。これらは、日本のベトナム学研究者、ベトナム人留学生、ベトナムの日本学研究者の間ではよく知られていることである。

しかし、それらの交流はあくまでも両国間の外交関係として正統に認められなかったため、長くかつ両国民の間に望まれながらも実らない結果となった。

ベトナムと日本の本格的な関係は、1973 年に両国間に正式な外交関係が樹立されてからである。特に 1993 年にベトナムのキエツト首相が訪日して以後、両国関係の緊密化は順調に進み、現在は、首脳間の往来も頻繁となっている。ベトナムは、日本を最大の協力パートナーとして位置づけ、日本も多額の ODA をはじめ、民間の投資、技術移転等、力強くベトナムの経済発展に貢献している。

新しい時代を迎え、両国間の文化関係を今後より発展させていく必要がある。確実な結果を出すためにも、今後ベトナムでの日本文化研究が責任ある体制の下で正統的、計画的に行われることが望ましい。次にそれに関するいくつかの課題を取り

1 日本人町：16 世紀の終わりから 1636 年の江戸幕府の鎖国令発布までの間に、朱印船による東南アジアとの交易が盛んに行われた時代、交易する土地に残り、その地域に日本人だけの集落を作った事から日本人町は始まった。ベトナムのホイアン、ダナン、タイのアユタヤ、ルソン島のデリラオとサンミゲル、カンボジアのプノンペンとピニャールーなどがあった。1636 年の江戸幕府の鎖国令以降は新しい日本人は訪れなくなり、また現地の日本人は日本へ帰れなくなり、現地の住民の中へ自然ととけ込んで行き消滅してしまった。「ベトナム辞書」homepage1.nifty.com/Cafe_Saigon/d01.htm

2 在ベトナムの服部則夫大使のスピーチ「ベトナムの「日本に学ぶ」東遊運動」www.vn.emb-japan.go.jp/html/jabout_phatbieu_1moi.html による、2005 年

上げ検討してみたい。

1. ベトナムにおける日本文化理解の現状

ベトナムでは「日本」という国が、どのように理解されているか。ベトナムの日本研究の文献、新聞、マスコミ、インターネット等を通して、日本文化への一般のイメージや幾つかのアプローチを見てみよう。

(1) 一般的イメージ

ベトナムの一般の人々は昔から現在まで「日本」や「日本人」に対して様々なイメージを持っている。その中には、暗く否定的なイメージもあるが、明るく肯定的なイメージの方が遥かに多い。明るいイメージとしては、「日本」は「桜の国」「日が登る国」「富士山がある国」「扶桑という国」等と呼ばれている³。これらの言葉の響きは優しく、明るく、輝くような意味合いを持っている。また、「日本人の女性」は芯がしっかりした、理想的な結婚相手⁴とされ、男性は、昔なら「武士」また「武士道」の精神で「主君には忠を尽くし」、英雄的な行動をするとされる。

このようなイメージは、特にベトナムの年配の人々や、日本の社会に接触した経験のない人々の間で存在する。また、ベトナムの文献にも日本についてそのように言及されていることが多い⁵。

現代のベトナムでは、日本のバイク、自動車、家庭電化製品、パソコン等を通して、「日本製」の商品に憧れ、日本の技術に驚嘆し、品質の良さに対する信頼度が非常に高い。「トヨタ」「ホンダ」「三菱」「着物」「味の素」等の名称も人々に親しまれている。

日本の漫画は「ドラえもん」を筆頭にして、他の漫画本も多くのベトナムの子供たちに読まれている。ベトナムの漫画本の状況は、日本のものが80%、他の外国のものが15%、ベトナムのマンガは僅か5%である。⁶

テレビドラマでは、「おしん」が多くのベトナム人、特に女性に圧倒的な人気を得た。最近では日本女性のイメージが、新聞やマスコミ等の情報によって少しずつ変わってきており、現在は、徐々に近いイメージに変わってきている⁷。しかし、長い間、「おしん」を通して、日本女性は、おしんのような人というイメージが植え付けられ、現在もベトナムの俗語には「Oshin」という言葉があり、それは「専業主婦」、「ハウスメイド」、「ご主人に尽くす」などの意味を指している。

3 フウ・ゴク、『桜と電子技術』文化出版(1989年)、グエン・ティ・ホン・トウ『日本語の諺研究』(博士論文)、ニャト・チュウ『東洋文藝の話』(教育出版-2003年)、チャン・バン・キン「日本文化特徴の探検」東アジア・日本研究雑誌、1998年3号、他の文献。

4 ベトナムでは「料理は中国、妻は日本の女性、住まいは西洋のもの」という諺がある。

5 フウ・ゴク等の前掲研究者

6 ルウ・ティ・トウ・チュウ「日本文学翻訳」

www.dongdu.org/cgi-bin/index.cgi?action=viewnews&id=271

7 KhanhDDSA「現代の日本女性」、www.dongdu.org

2003年に日本・ベトナム外交関係樹立30周年記念を機会に、ハノイやホーチミン等、大きな都市を中心に多くのところで「日本文化日」「日本映画週間」等、様々な日本文化紹介活動が行われた。その後、以前より活動の種類も増し、執り行う地区も多くなり、ベトナムの若者は、日本の魅力に心を打たれ、日本へ興味を高めたといえる。

一方、暗く否定的なイメージとしては「ファシズム」や「帝国主義」であり、その他、日本人は「背が低い」といったものであるが、これらのイメージは日本に接触する経験のなかった時代からの余韻であり、現代社会の日本に触れることに伴い、段々変わってきている。

しかし、日本は距離的に近いにも関わらず、一般のベトナムの人々にとっては「遠くにある社会」であり、正確に理解されているとは言えない。例えば、「日本映画」というと、テレビドラマではあるが、やはり「おしん」が思い浮かぶ。なぜならば、「黒沢映画」など日本映画の情報は、ベトナムにはほとんど伝わっていないからである。また、日本文化紹介活動が大に行われるようになってきているが、これらがまだ食文化や有形文化に留まり、若者を対象にしたものが圧倒的である。そのため、日本と直接的な接触のない年配の研究者や他の人の間で以下のような見方がまだ存在している。

(2) 検討された見方

簡素化された傾向にはまた二つの見方が示されている。その一つは類似点・共通点をもとに日本文化を推測する類似法といわれるものである。

日本とベトナムの間には、幾つかの共通点、類似点が見られる。

地理的な面では、同じアジアにあり、東アジアと東南アジアに属しており、距離的にも近い。したがって、日本とベトナムは人種の面でも同じアジア人で、黄色人種である。

産業の面では日本とベトナムは稲作を中心に生活を営んできた伝統がある。

食文化の面でも箸を使い、米を主食としている。

文化や言葉の面ではベトナムと同じく日本も中国から多くの文化的な影響を受け、特に漢字を取り入れ、同じく漢字圏に属している。ベトナム語の中にも、日本語の「音読み」に似た発音が幾つか見つかる。

しかし、類似点のみを取り上げ、それに関する文化の側面も同じであり、ベトナム人の立場から日本文化を解説しようとしたり推測したりするのは非常に危ないことである。この傾向は現代の日本社会に接触した経験のない何人かのベトナム人研究者の間にまだ見られる⁸。

それは、どの共通要素に対しても異類の反論ができる。類似した要素があるとは言え、それぞれの要素には、様々な要因、歴史があり一概に同様に結論づけること

8 フウ・ゴク、前掲文献

はできない。

たとえば、同じく箸を使ってはいても、日本と比べる時、白幡氏によって指摘されるようにいくつかの異なったことが考えられる。

「朝鮮、中国、ベトナムなども、箸を使うが、これらの国では匙さじも使い、箸と匙はセットになっている。飯も菜も汁もすべて箸で食べるのは日本だけの特徴である。」⁹。また、ベトナムでは元々割り箸や利休箸というものはなく、片方の先端だけ細く削った箸が主であった。

こうしてみると特定の文化を解説するとき、慎重かつ多方面にわたって客観的な見方をしなければ、研究視野が狭くなってしまう。

類似法と同類の簡素化を取り上げられるもう一つの見方は単純化されたものである。

ベトナムの日本研究に関する学会、研究会で「なぜ、日本は経済大国に発展したか」という質問がよく出される。素早く先進国に変身を遂げた日本に対して「謎」、「秘訣」といったようなものが日本の文化にあり、それを解くことができればベトナムも成功の鍵を手に入れられるという考えが研究者の中にある。その意気込みはよいとは言え、それに対して、日本の歴史上の出来事さえ、それが「マスターキー」となっていると結論づけてしまう。典型的な例としては、そのマスターキーは「明治維新」であるという考えは多くのベトナム人研究者に認識されている。

「明治時代に明治維新が日本を強国へと築きあげる土台となったことは日本社会の通念である¹⁰」このような見方は、ベトナム人の研究者に限らず、報道関係、マスメディア関係の人々にも見られる。

古くは、ベトナムと同様に農業社会であったが、明治維新によって、恐るべき高度経済成長を遂げ、世界の強国になった日本は、ベトナムの人々を驚嘆させた。ベトナムの指導者、先駆者の中で「日本に学べ」という方針が100年前から立てられ、現在も続けられている。

これはベトナムと日本に共通点を見、遠くにあり、人種、文化が異なった西洋の国々より、同じアジアの日本を学んだ方が、効率的に目標が達成できるという意識がベトナム人の中に働いている。

冒頭にあげたファン・ボイ・チャウの「東遊運動」は、2005年に、「東遊運動100周年」を記念して、ファン・ボイ・チャウの東遊運動の精神を生かすため、いくつかの大学や研究所でシンポジウムや学会が行われた。また記念行事もベトナム各地

9 白幡洋三郎『知らなきや恥ずかしい日本文化』ワニブックス、2003年より87項

10 ホアン・ヴァン・ヒエン、ズオン・クアン・ヒエツ、日本研究雑誌、2003年2号、cnb.org.vn/Default.aspx

で執り行われた。そこで発表された講演内容を通して、日本文化アプローチの幾つかの視点が観察できる。

記念行事の中、一つを例に取り上げてみたい。

ベトナム電子新聞(VietNamNet)¹¹は、2005年に日越文化交流会を代表したベトナム在住の日本人でベトナム宗教史研究家の大西和彦氏とベトナム人の歴史研究家ズオン・チュウ・コック氏を招き、ベトナム電子新聞の総編集長グエン・アイン・トゥアン氏と「東遊運動を学ぶ」という討論会¹²が中継された。

この討論会の内容は、ハノイ・アムステルダム高校のホームページを始め、ベトナムの様々なホームページによって公開された。

グエン・アイン・トゥアン氏は当新聞社の総編集長としてベトナムの前首相ファン・バン・カイや外務省の要人とともに米国等に同行した経験を持つ人物である。討論会のやり取りの一部を仮訳してみたい。

「トゥアン氏：大西さん、日本が奇跡的な成長を収められたのは明治維新が始まってからですが、明治維新というのは開国、維新、国外からの知識、技術、情報を受け入れた一種の運動でしょう。この運動が日本へ与えた価値を教えてくださいませんか。

大西氏：明治維新は1868年に始まりましたが、日本の発展土台はそれ以前に存在していたことを言うべきです…（中略）。ベトナムは、1840年に既に船の製造もでき、世界へ開国したということは私達も存じていますが、当時、ベトナムの発展及び開国は日本ほどではなかったと言えます。

トゥアン氏：もちろん、当時日本は高度発展しましたが、明治維新は明らかに日本を発展させ、他の国を切り離した出来事であります。その出来事を支えた根本的な要因は日本に愛国精神があることを言えるのであろう。その愛国精神が本質的にどこで育まれたか教えていただきたい。

ベトナム人にも愛国心があり、1945年当時は、私達にも日本人と比べられるほど愛国精神、建国精神を持ったが、…

ところで、現在でも日本はその愛国精神がまだ残っていますか」。

以上の討論会からはトゥアン氏には「明治維新」及び、その時代を支えた「愛国心」が日本発展の鍵であると考えているようであるが、それは「愛国心」だけではベトナムの社会を日本ほど発展させられないのが現状であり、ベトナムの場合に当てはめられないという戸惑った気分も現われ、彼の理解には矛盾があるのが彼自身も感じているようだ。

この討論会がインターネットに公開された時、それに対して、いくつか意見・感想が述べられた。その中、HaiAu(ハイ・アウ=ハンドルネーム)の意見が注目すべ

11 www.vnn.vn

12 「ドンズーの経験、見分ける能力及び受容雄姿」 www.hn-ams.org

きである。

「大西氏が話したように明治維新の前に日本はすでに発展していたが、いまだに、多くのベトナム人は日本が明治維新後に発展の道に入り始めたとみている¹³。明治時代は明治維新の時代ともいうが、その前、江戸時代から日本は発展していた。明治時代の発展は、江戸時代に作り上げられたものが伝承され、続けられてきたわけである。我々は日本に対する時代遅れや不適切な見解を訂正すべきであり、今後日本研究の人材を養成すべきである」とのことである。

ベトナム人研究者の中に、「ドンズー運動」やファン・ボイ・チャウの思想、ベトナム人の愛国心等に対して、客観的・学術的に分析したビン・シンという学者がいる。氏は海外に住んでいるが、日本の歴史、文化研究に真剣に取り込み、ベトナム語による幾つかの日本文化の成果を出版している¹⁴。ビン・シン氏の研究を正当に評価している者もいるが、その考えが主流になっておらず、主流になるまでにはまだ時間が要する。ビン・シン氏のような考えを持つ研究者はベトナムにはまだ珍しい。

(3) 極端な見方 (日本に対して)

日本と交流が深まっていくのに伴い、日本語教育事情も変わってきた。教育機関、学習者が毎年増え、特に最近一躍急増してきた。

国際交流基金の資料による¹⁵とベトナムでは日本語教育が1970年から開始された。停滞した一時を抜け、1990年代からは再出発されるようになった。1990年には高等教育機関ではハノイ外国語大学とハノイ貿易大学の2大学で行われたが、その後、他の国立大学、私立大学でも日本語は教えられ、毎年、日本語教育機関の数が増えていった、この15年間のあいだには塾等を含め、2006年には、日本語教育機関数は110に上り、世界全体の0.8%、第18位となっている。

2003年には中学校でも日本語教育が開始され、ベトナムの日本語の学習者数は2006年に29,982であり、2003年から2006年の3年間に学習者数は1.6倍に増加したとのことである。

1990年以降、国費留学が始まり、1995年までは、まだ少なかったが、その後、毎年、数が増えている。

日本語学習者が増えると共に、日本の社会、文化に直接触れ、様々な情報を得る機会も増えている。

国内では「日本に学べ」の精神を掲げ「東遊」やファン・ボイ・チャウの名前に

13 つまり、明治維新が行われなかったならば日本は今のように発展しなかったであろう。明治維新は日本の発展に極めて重要な役割を果たしたとみなしている。

14 ビン・シン『ベトナムと日本文化交流』ホーチミン文藝出版社及び国学研究所出版、2001、
に対して、ヴオン・チャー・ニャンの評論文献「新時代—研究・討論雑誌」2006年第8号、

15 日本語事業部 企画調整課「世界の日本語教育とベトナムにおける日本語教育の動向」海外日本語教育機関調査から『日本語学・日本語教育』国際シンポジウム論文集、ハノイ国家大学出版社、2007年より277-279頁

因んで「ドンズー日本語学校」¹⁶、当学校から日本へ行った学生の中に「東遊留学生グループ」¹⁷、他に「ファン・ボイ・チャウフォーロー会」¹⁸等が設立され、それらの会にもホームページが設けられ、ベトナム内外の若者に活用されている。留学生が多くなり、留学生には「日本におけるベトナム留学生協会」¹⁹、「ドンズー留学生協会」²⁰、「ベトナムオンライン」等²¹が設立され、幾つかのホームページが立ち上げられている。これらのホームページには日本の社会や日本文化の情報が取り込まれており、学生達の情報・意見交換の場となっている。

内外のベトナム語のホームページを通して、日本社会・日本文化に対してベトナムの留学生、研修生等、若者の見方を考察することができる。

若者の中、客観的または丁寧に様々な角度から多くの情報を紹介している者がいる。それは日本の社会の中に住んでいる大学生・大学院生であり、皆によって書かれている情報は正確にアップデートされる。

しかし、極端な見方を持っている者の方が大勢いる。「日本に惚れる会²²が設置され、日本の、人、文化、生活、すべてが魅力であると思う者がいれば、それに対する常に違和感や抵抗感をもっている者もいる²³」。

以下にその二つの極端な見方を取り上げる。

「私は日本に、特に日本文化に惚れるものです。日本には着物を着て素敵な女、手に刀をもつ侍、目先から舌にまで絶好のすしなどがあり、すべてが私の心えを打っている。」²⁴

これに対して、「私にとっては、日本は厳しい生存競争の環境にあり、その中、人々が形に嵌り、冷たい情緒で人間関係を行い、古いことに頑固に執着している。毎日、そのような人たちと一緒に仕事をするのが最低です。」²⁵といったような意見も出されている。

留学生のうち、日本文化を専門とする学習者は数がまだ少ない。情報は増えるが、ベトナムの教育・文化の影響から「異文化」の日本文化に対して理解しがたい、日本を理想的な立場から現実の社会に接して、落ち込んだ場合、基礎知識、教育視点がまだ確立されていなく、戸惑う場合も少なくない。

16 www.dongdu.edu.vn を参照されたい。

17 Dong Du Students Group in Japan www.dongdu.org を参照されたい。

18 Doan Thanh Nien Phan Boi Chau is a nonprofit youth organization formed by a group of young Vietnamese in Southern California in 1996. The group was named "After Phan Boi" www.dtnpbc.org を参照されたい。

19 Vietnamese Youths and Students Association in Japan, www.vysa.jp

20 Dong Du Students Group in Japan - dongdu.org

21 www1.ttvnl.com, www3.ttvnl.com, www5.ttvnl.com.

22 www.ttvnl.com, Hoi nhung nguoi Cuong Nhat www8.ttvnl.com/forum/Sothich/857636.ttvn

23 5nam.ttvnl.com/jc/152098.ttvn Nước Nhật trong mắt tôi--Nước Nhật trong mắt bạn

24 www3.ttvnl.com/forum/Sothich/857636.ttvn

25 5nam.ttvnl.com/jc/152098.ttvn Nước Nhật trong mắt tôi--Nước Nhật trong mắt bạn

(4) 日本文化教育・研究の現状

日本語教育は多くの機関で行われるようになり、日本事情、日本文化も併せて教えられるようになった。

しかし、日本文化を専攻とする学科や学部がまだ大学には設置されていない。

ハノイでは大きな日本教育機関として六つの大学に日本語学部が設置されているが、そのうち、独立した学部が四つあり、学部の中に設置されている学科が二つある。そのうち「日本学」と名乗っているのは二つある。その一つはハノイ国家大学に所属する人文社会科学・東洋学部である。もう一つは1995年から設置された「日本学」学科及びハノイ大学(旧ハノイ外国語大学)の「日本語学部」は2007年から「日本学部」に転じたものである。これらの学科・学部にはベトナム人の日本文化研究者が少なく、各大学間の交流・連携の形での教育も行われていない。また日本からの専門家の招聘制度も導入されていないため、日本文化の教育には大きな困難がある。

大学院では日本語学、日本文化専攻の教育を行っているところは未だどこにもない。

日本文化研究所に関しては、1993年にベトナム首相決定書に基づき国家社会・科学研究所に属する東北研究院には日本研究センターが開設された。このセンターは現在、ベトナムでは最初の正式な日本研究機関として存在し、ベトナムで唯一の日本研究センターとなっている。

当院の学術機関紙として「東アジア・日本研究雑誌」がベトナム語で刊行されている。対象とされている地域、専門分野は韓国、中国、日本、ベトナムなど多くの範囲に渡るため、日本文化に関する論文や記事が取り上げられることも、そしてそれらを投稿する専門家も限られている。

2003年に国際交流基金の助成により、当「日本研究センター」に日本研究に関するホームページが開設された。それを通して、ベトナムにおける日本研究の現状が幾つかの角度から観察できる。

ホームページが開設されてから現在まで、4年経っているが当初と変わらずベトナム語でのみ運営されており、今後、日本語での紹介ページが開けるかどうかの見通しはないようである。

ホームページに「日本研究者」「日本研究書籍」「日本研究文献」等は紹介されているが、それぞれの項目の情報が不足していたり、正しく紹介されていないところが見られている。

例えば、「日本研究書籍」は、約70点挙げられているが、殆どが経営・経済関係の書物である。その中、文化を記述したものは3、4点しかない。

このホームページに上がったものの他に、ベトナムでは、日本文化について記述された書物が少ないながらも、まだある。その書籍のリストを始め、「日本研究者」「日本研究文献」などについての情報を補足し、正確にするため、真剣な調査が必要となる。しかし、

それには時間と人材が求められ、当センターの力では応じきれない。

当日本文化研究センターが持っている問題は他のベトナムの日本学教育機関にも見られるから、ベトナムにおいて共通する。そしてベトナムに典型的な問題であろう。

要するにベトナムにおける日本学・日本文化研究は次のような状態にある。

①元来はベトナム、中国、ヨーロッパなどの研究者であったが、最近になり新たに日本を研究対象に加えた者が多い。従って研究者としての経験はあるものの、日本語をほとんど解さず、日本語の資料、情報に接することがほぼ不可能な者が多く、更なる研究の発展が望めないケースが多い。

②90年代に入り多くの研究者や学生が日本へ留学した結果、日本の文化、習慣、社会事情などに精通し、不自由なく日本語を駆使できる者も出てきた。なかには日本の大学で修士号、博士号を取得した者もいる。

しかし、このような研究者は未だ人数が少ない上、彼らの間に相互の交流がなく、日本での経験を生かし、互いに協力しあう環境はまだ作られていない。

③一方、ベトナムの大学で日本語・日本文化について専門的に勉強した学生が、卒業後、さらに日本語・日本文化を専攻するための大学院がないため、やむを得ずハノイ国家大学にベトナム語学部、或いは東洋学部に籍を置くことになる。

しかし、ベトナム語学部では言語学の知識は習得できるが、日本語、日本文化については学べない。東洋学部では一応、日本に関する科目も設置されているが、数も少なく基礎的な知識がそれほど得られない。

ベトナムの政治・文化・教育の中心である首都ハノイにおいても日本語の資料を使用して日本を研究できる研究者は少ないし、別々の機関に所属している。国家人文社会科学研究所に属する家族・ジェンダー研究院にはチャン・ハン・ザン、アジア東北研究院にはホーホアン・ホア（現在定年退職）、人間研究院にはヴ・ティ・ミン・チー、ノム文字研究院にはゴ・ティ・オアンが、ハノイ国家大学に付属する人文社会科学大学にはファン・ハイ・リン、外国語大学にはゴ・ミン・ティウ、大学院研究科にはチャン・ティ・チュン・トアンが、そして、教育文部省付属の貿易大学にはグエン・ティ・ビク・ハーが、それぞれの機関に日本研究者として勤めている。数の上でも少ないし、その上、違った所属機関や研究分野で働き、彼女達には「日本学研究」に関する共同教育・研究するための機会等が提供されずに、それぞれ自分の孤立した研究を展開しているのが現状である。

以上の現状が、教育・研究遅滞の原因となっており、ベトナムでの日本研究の基本的教育場面は得られていない。そのため、一般の人々に提供される情報は部分的、単発的なものになってしまう状況にある。

2 日本とベトナムの文化理解の見直し

ベトナムでは日本文化の理解がまだ不十分であり、また不正確な状態にあるのが現状である。中国はもちろん、タイやインドネシアなどの東南アジアの近隣国よりも非常に遅れている。これらの国では以前から日本学を専攻する修士課程が既に設置され、現在も活動しているが、ベトナムでは今だに、日本文化への基礎知識を育成する機関は、依然としてまだ解決されていない。

日本政府や在ベトナムの日本大使館は日本文化発信に努力しているが、ベトナム側においてはそれらの政策を積極的に受け止めて日本文化を理解しようという正しい姿勢を取っていないと言える。また、両国間の文化交流がまだ乏しい状態にあることを把握した上で、在ベトナム日本大使館と他財団、企業、また教育・研究機関が力を合わせ、実行性のある、効率的な対策の再検討が必要とされる。

3 今後の課題

確実に、また効率的に日本文化理解の現状を変えるためには、教育から力を入れる必要がある。基礎知識を学んだ若者からベトナム社会に浸透させるという方針に基づき、現在までのやり方を見直し、新しい時代により適切な戦略を図る。

以前は大学に日本語教育機関が設置され、その中で日本文化を教えるのが主流であったが、今後は大学に日本学という機関を設置し、その中で日本語教育が行われるのがベストである。

日本側の協力を期待しながら、日本へ留学した経験をもつ人材を動員し皆の力を合わせ、以下のように日本文化研究を促進するため短期・長期計画をたててみた。

3.1. 短期計画

ここでの短期計画というのは、3年から5年の間に実行したいと考えているのである。

(1) 日本語教育の重視

近年、ベトナムでの日本語教育の状況は、量的・質的の両面から改善されてきている。しかし、日本事情、日本社会を理解するためには、日本語運用能力が欠かせないということを前提として日本語の重視、日本語教育がさらに強化されることが重要である。

現在、ベトナムではロシア語、ドイツ語、英語、フランス語、中国語の五ヶ国語が国際的・共通の言語であり、国家の正式な外国語教育として認められている。五ヶ国語の学習者には、大学入試、公務員採用試験や国家試験を受ける際には、有利点が付けられている。

日本語を他の五ヶ国語と対等な地位に引き上げ、それによって学習者に意欲を与

えたい。そうすることにより日本語学習者の数が増えることに繋がり、日本文化研究者を確保することを期待したい。

これは在ベトナムの日本大使を始め、ベトナムの大学と提携を結んでいる日本の大学と協力してすすめていくことが望ましい。

一方、日本語教育機関は大学の中で独立した資格を持つように力を入れる。

ベトナムの大学の運営は、官僚的なところが今だ強く残っているので、日本に関する資格が小さければ小さいほどベトナムの行政に縛られ、自主的かつ自由に動けなくなり、活躍を制限されてしまう原因となる。特にその機関のリーダーは日本語ができなく、ただ肩書き・形式ばった人材だけでは日本語をはじめ、日本学教育に損益をもたらすと考えられる。できるだけリーダーにおいては、日本語ができる人材であり、機関内の専任講師の育成にも尽力できる者がふさわしいと感じる。

1999年にハノイ外国語大学の「日本語科」から「日本語学部」に変更、2006年には貿易大学が「日本語学科」から「日本語学部」に昇格となったこと、また、ハノイ国家大学所属の外国語大学・東洋言語文化（中国・日本を含める）学部から将来的には日本語学部として独立したいという意向が伝えられている。

（2）日本文化教育の重視

日本語教育と同じく、日本文化は教育・研究機関として大学の中に独立した資格を持つようにする。また、独立した日本文化、日本学を教育する学部の中で、日本語教育が行われるのがベストといえる。

2007年にはハノイ大学（旧ハノイ外国語大学）の「日本語学部」が「日本学学部」に転じたこともこの傾向といえる。

しかし、それ以上に、日本学に関する修士課程を設置することも考えなければならない。

各大学では英語、フランス語、ロシア語等の外国語には修士・博士課程が設置されているが、日本語に関する大学院研究課程は未だに設けられていない、博士号を持っている日本研究者がいるが、分離された大学・研究所に勤め、次代の日本研究者を育成するには長時間を要する。ハノイ国家大学を始め、ベトナムではそれぞれの大学や研究所は自分だけの力ではこの問題を解決することができないと考えられる。

それを解決するため、ハノイ国家大学かどれかの大学は纏め役を持ち、当大学に勤める専任講師と他の大学の日本語ができる日本研究者を全員動員し、日本の大学、教育・研究機関と交流・提携を期待し、「日本学・日本文化研究促進センターを開設し、センターの中に「日本語・日本文化」を専攻する修士課程を設置することも一つの解決方法と考えられる。

ハノイ国家大学は他の国立大学とは違ってベトナム教育・訓練省の管轄であるため、首相に直轄されるので、その問題を解決するには利点がある。そして、ベトナムの政府から2010年までに正規の総学生数の4分の1が大学院に進学することを

使命として与えられているので、日本学に関する修士課程を設置するのもその使命を果たすのに役立つと思われる。

センターを開設することを短期的な計画とするが、センターの活動には事務的な面では独立した機関とし、学術的な面では短期的・長期的の両面で計画を立てる必要がある。

センターの中に、日本の関係機関の協力を得、ベトナム国家大学にベトナム人学生を対象に「日本語・日本文化」の修士コースを開設する。

「日本語・日本文化」修士コース

- ① 教育プログラムに関しては、日本の方式を大幅に取り入れる。
- ② 使用言語は分野により、日本語、英語、ベトナム語のいずれかにて行う。
(必要に応じ通訳をつけることもある。)
- ③ コース終了後に修士号を授与する場合の大学・機関名は：
(a) 日本の大学・機関名で (b) ハノイ国家大学名で (c) 両者共同で、のいずれかによる。

基本的な枠組み

- (1) コースにおいて言語・文化を専門とする日本人研究者を招聘し、ベトナム人の日本研究者とともに講義、学生の指導にあたる。
- (2) 教育目標
 - ① 日本語及び日本文化についての基礎知識を土台に専門的な知識を修得する。
 - ② 日本語学、日本語教授法、日本文学・日本文化論等について、高度な専門教育を目指す。
 - ③ 本修士課程を修了した後、日本の大学の博士課程に進学できる能力を養成する。
- (3) 期間
原則として2年間。但し、特別な事情がある場合は更に1年間の延長を認める場合がある。
- (4) 入学資格
ベトナムの国立・私立大学の日本語学部、日本語学科の卒業生、及びそれと同等と認められる学力を有する者。(日本語及び日本事情などに関して、1000時間<85単位程度>以上、学習した者を目安とする)
- (5) カリキュラム
日本側のパートナーシップの教育者と、コースの以上(a), (b), (c)のどれに連携教育が実現できるものによって共同で作成する。

3.2. 長期的計画

当センターの活動が効率的、長期的に続けられるために、更にいくつかの長期的

な計画を提案する。ここでの長期とは5年間から10年間の期間である。

教育では、さらに日本人学生及びベトナム人の学生を対象とする以下のコースも設置する。

(1) 日本人学生及びベトナム人学生を対象に博士課程を日越双方で開設する(Sandwich Program)。

①指導教官は日本人、ベトナム人の2名とする。

②学生は、一定期間、必ず相手国に滞在する。

③論文の審査は日本人とベトナム人からなる審査委員会が行う。

(2) 日本人の学生を対象にベトナム国家大学に日本人向けの修士・博士課程を設置する。

選考は主として書類審査により、本人の希望に応じ、ベトナム人大学院生と同じカリキュラム、または特別カリキュラムを組んで指導を行う。修了時にはハノイ国家大学から修士号、博士号を授与する。

(3) 日本語・ベトナム語通訳・翻訳コース

ベトナムでは日本文化紹介活動の一つとして、日本文学・文化書籍の翻訳・出版を始め、それを通して、「日・越両言語の通訳・翻訳」コースを設置することも考えられる。

まず、「国際交流基金の翻訳・出版推薦リスト」等を参考し、他の日本大学・研究機関、国際日本文化研究センターの専門家の指導を受け、長期的にベトナム語に翻訳する日本語書籍のリストを作り、毎年少なくとも一つの書籍をハノイ国家大学の出版社と連携して、翻訳・出版の目標を立て、累計的な計画を展開していく。

それらの書籍はまず当センターの資料とし、センターの日本文学・文化図書館に収納し、「日・越語翻訳」の科目の資料とし、学生の参考書とする。また、他のベトナムの日本語教育機関を始め、研究機関ならびに交流センター等の図書館に寄贈する。

そして、一般のベトナム人に紹介するため、市場販売もする。

また、ベトナム語の書籍を日本語に翻訳した日本人を招聘して、勉強会、共同研究、共同教育等を行う。

(4) 勉強会、シンポジウムを主催する

ハノイにいる学習者、研究者の間に10人ぐらいの小グループで勉強会や数十人規模での研究者発表会や百人以上のシンポジウム等を主催する。

その他3年ごとに1回、日本文化促進国際シンポジウムを開く計画をする。

(5) ハノイ国家大学における日本側との交流の窓口

ハノイ国家大学を始め、各大学では最近多くの日本の大学や企業と協力している。そのため、必要に応じて、本センターが窓口となって、書類翻訳、その他の協力を提供する。

(6) 日本文化の専門家招聘

以上の修士・博士コースは日本側の大学・センターと連携教育するので、そのパートナーシップの専任講師を主にする。日本から専門家をベトナムの大学に客員研究員・教授として招聘し、そこで直接ベトナム人学生に学ぶ機会を与え、また、ベトナム人専門家と共同で研究することも考えられる。すでに、日本の大学、研究センターでは、ベトナム人教授がベトナム文化を教えている。ベトナムも日本と同じように相手国に学ぶ姿勢を取り、知識を高めてこそ、はじめて正しい知識と両国文化の理解につながるのではないかと思われる。

終わりに

日本とベトナムの両国民の間には有好的な信頼関係がある。ベトナム人の中には「日本に学ぶ」の精神が常に強く存在し、日本人、日本文化に対して明るくて好意的なイメージが多く、両国の友好関係・文化理解にとって有利な点となっている。第二次世界大戦では、日本の軍隊もベトナムに来たとは言え、短期間であり、フランスやアメリカとの戦争と比べものにならない。日本に対して対仏、対米戦争ほどの厳しさのイメージはない。ベトナムは1995年にアメリカと国交正常化、ASEAN正式加盟、1998年にAPEC正式加盟、2007年にWTO正式加盟などを果たした現在、特にベトナムの外交基本方針は全方位外交の展開、特にアセアン、アジア・太平洋諸国等近隣諸国との友好関係の拡大に努めることにある。新しい局面にあるベトナムに対して、従来から日本はベトナムの経済発展に貢献を重ねてきた。今後さらに日本がベトナムにおける、日本文化受容を計画的、効率的に推進し、より力を入れてくれることを望んでいる。